

フランス語の動詞慣用句の意味的固定性における 単数形／複数形の役割について

フヨ・バティスト

(筑波大学大学院)

従来、先行研究においては、動詞慣用句の固定性の説明は、語源学者や文体論学者の範疇のものとして限定され、従って、動詞慣用句に関する言語学的な分析はほとんどなされてこなかった。その結果、個々の動詞慣用句には単数形／複数形の使い分けがあるにもかかわらず、その使い分けの規則性は明らかにされてこなかった。以下の例に示すように、動詞慣用句には単数形が固定性を持つものと、複数形が固定性を持つものがある。

単数形(固定性)	複数形(固定性無し)
tourner la page	tourner les pages
sentir la rose	sentir les roses
faire le mur	faire les murs
chasser le sanglier	chasser les sangliers
connaître la chanson	connaître les chansons

単数形(固定性無し)	複数形(固定性)
mettre la voile	mettre les voiles
raser le mur	raser les murs

本発表では、この意味的固定性を言語学の問題として再検討し、これらの表現における単数形／複数形の使い分けが語源や文体によるものではなくむしろ言語学的な規則に基づくものであることを新たに主張したい。つまり、ここに見られる単数形／複数形の使い分けは、語源や文体に依拠すると考えられてきた固定性によって拘束されているのではない。そうではなく、むしろ、この単数形／複数形の区別こそが個々の動詞慣用句の慣用句らしさの度合いを決めているのである。そして、個々の動詞慣用句における単数形／複数形の機能的意味を再検討することを通じて、単複の概念を再定義する必要があることも明らかにすることにした。